

Title	静脩 Vol. 40 No. 2 (2003.10) [全文]
Author(s)	
Citation	静脩 (2003), 40(2)
Issue Date	2003-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/66047
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



静脩

2003年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 40, No. 2

「ステファヌス版」以前以後 『プラトン著作集』の伝承史から

大学院文学研究科教授 内山 勝利

1578年、スイスのジュネーヴで刊行されたステファヌス版『プラトン全集』は、初期印刷本の中で、今日なお研究上の実質的な意義を持ち続けている数少ないもののひとつである。大型フォリオ（二折）判の3冊本で、合計2000頁を越える。その一本が本学文学研究科閲覧室の田中美知太郎文庫にも所蔵されているが、時代による状態劣化のために、背の綴じ目がこわばってページを開くこともままならぬ状態になっていた。長い間の気掛かりだったが、昨年ふとしたきっかけから、工芸製本家の山野上さんの手を煩わせ、現在わが国でこれ以上望むのはむずかしいほどに、たんねんな修復をしていただくことができた。元の装丁がいつごろのものか判然としないが、それ自体に歴史的価値が認め



修復されたステファヌス版『プラトン全集』。

られるようなものではなかったので、表紙などは（極力原装に即しながら）新しい素材に改められた。また修復以前の状態では、本来3分冊のはずのものが2冊に合本されていたり、わずかな乱丁も

見つかったりもしたが、これを期に当初のあるべき形にもどしてもらうことができた。何よりもありがたいのは、美しくなった本書を破損の不安なく閲覧できるようになったことである。



*

ギリシア・ローマ古典の古い印刷本の多くは、今日ではおおむね研究的に参照されるべき「テキスト」としての役割を終えて、むしろ記念碑的意義（あるいは尚古趣味的価値）によって保存されるとすればされるべきものとなっているのが実情である。後で多少触れるように、19世紀を中心とする近代古典文献学の隆盛の結果、そこで確立された精緻な原文批判の手續を踏んでいない旧来の印刷本は、研究上通用しないものになってしまったからである。たとえば、ルネサンス期最大の書肆アルド・マヌツィオ（アルドゥス・マヌティウス）が16世紀初頭にヴェネツィアで印刷刊行したきわめて多数のギリシア語原典は、ほぼすべてが西欧における editio princeps でありながら、不十分な編纂と校訂のために、ほとんどがいつしか顧みられな

なくなってしまっている。

はじめてギリシア語版『プラトン全集』を出版したのもアルド（アルドゥス）であった（1513年）。しかし、これも不完全で不備欠陥の多いものとどまっておらず、広く流布するには至らなかった。かわって西欧の古典学世界に定着し、長く「標準版」としての地位を占めつづけたのが、それより半世紀以上のちにアンリ・エティエンヌ（ヘンリクス・ステファヌス）によって刊行されたステファヌス版『プラトン全集』にほかならない。これは文字通りの opera omnia であるとともに、本文校訂においても今日なお無視しえないほどの高水準を達成している。それだ

けに、（おそらく長年にわたって）相当部数刷られており、現に世界中に残るもの何部というような大稀覯本ではないが、文献としての価値は高い。16世紀末以降19世紀に入るまでの200余年の間、西欧の哲学者や知識人たちが目にしたプラトンのテキストは、もっぱらこの版だったはずである。たとえば、18世紀啓蒙思想家の一人、ディドロが『ソクラテスの弁明』を仏訳するのに用いたのも明らかにこれであった（以前ある機会に必要あって対照したことがある）。また、シェリングやヘーゲルなどは、南ドイツのツヴァイブリュッケンで1781年に出版されて広く流布したピボンティウム版（出版地のラテ



ステファヌス版『プラトン全集』の版組（『ティマイオス』冒頭頁）。左欄にステファヌス校訂のギリシア語原典、右欄にヨハネス・セラヌス Jean de Serres によるラテン語訳を収め、中央に10行ごとの目印としてAからE（この頁はDまで）の符号を付す。ちなみに、セラヌスは相当量の註解、長文の序なども執筆しており、本来なら共同編纂者としてステファヌスと併称されていいはずだが（事実、扉頁にはそう銘記されている）、この古典学者の存在はすっかりかすんでしまっている。彼のラテン語訳はかなり問題の多いもので、ステファヌスはいろいろとクレームをつけるが、セラヌスは聞き入れない。その結果、本書の欄外註にはしばしば両者の意見の違い（ステファヌスによる誤訳の指摘と、それに対するセラヌスの意固地な反論）が両論並記的に組み込まれるという摩訶不思議な体裁をきたしている。二人の共同作業は、けっして順調とはいえず、訴訟沙汰までからんだ、いかにも折合いの悪いものだった。この間の経緯には、U・エーコあたりの好みそうなドラマがいっぱいである。

ン語風呼称）を手にしているのだが、これも事実上ステファヌス版テキストをそのまま流用したものである。近世哲学史研究において（のみならず思想史・文学史研究においても）、プラトンのテキストとの関連が問題となるような場合、厳密を期するためには、今日の流布版とは異読の少なくない、こうした同時代のエディションを前提に考察・議論する必要があるだろう。

「標準版」ということには、もう一つの重要な実際の役割がある。西洋古典学においてそう呼ばれるものは、今日でもまさに当該著作の共通基準としての役割を担い、たとえば著作を引用・参照する場合、「標準版」

の頁付けや行数などによって所定個所を指示するのが全世界的な約束事となっている。この分野で（のみ）十全に確立された、きわめて有用な慣行と言ってよかろう。以後に刊行されるすべての版はもとより翻訳などにおいても、それとの対照を明示する方式が行き渡っている。試みにギリシア・ローマ古典の邦訳書を開いてみれば、それが手軽な文庫本であったとしても、必ず各頁の欄外に「標準版」との対応を示す数字が付されているはずである。そして、プラトンの場合には、その基準となっているのがステファヌス版にほかならず、所定個所は同書の頁付けと各頁に10行ごとに付されたA - Eの記号

で指示される（たとえば『ソクラテスの弁明』29Bとあれば、ステファヌス版29頁の11行目から20行目の間を指し、むろん必要とあればさらに細かく当該行数を数字で明示することもできる。もっとも、これは上述のように3巻本なので、些細なことながら、作品名こそ違え、同一頁付けが3箇所ありうる）。付言すれば、活字印刷本の登場による大きなメリットの一つは、場所や時を隔てた多数の人たちが、容易に共通のテキストを共有して比較参照できるようになったことである。「標準版」の取り決めがその便宜をさらに高めることは、言うまでもないであろう。

*

プラトン（前427 - 347）の著作は、そのすべてが今日まで伝わっているものと信じられている。問題ありとすれば、後代における偽作の混入をどう見積もるか、ということだけだと言っている。今日にまでつながる形で『プラトン全集』は、紀元後1世紀初頭のローマにおいて、トラシュロスによって編纂整備された。そのときすでに6篇は「庶出」著作（notheuomenoi）に数えられ、『全集』に纂入されてはいるものの補遺扱いされている。のみならず、トラシュロスがギリシア悲劇の上演形式になぞらえて9つの「四部作集」に纏め上げた36篇のうちにも、少なくとも数篇については、どこまでを「真作」として許容するべきかが問題として燻りつづけている。とはいえ、跡形もなく散逸したものが圧倒的に多い古代ギリシアの文学遺産のうちで、これはきわめて特例的な幸運にめぐまれたケースの一つである。

ここで伝承事情の詳細にわたるゆとりはないが、二千数百年前に書かれたものが今日まで伝えられることの困難は容易に想像できよう。さしあたり伝承媒体で見れば、おおよそ最初の1000年間はパピュロスに筆写された古代卷子本、つづく1000年間は羊皮紙に筆写された中世冊子本によって、ようやくグーテンベルクの時代にたどり着くのである。この間、とりわけパ

ピュロスの耐久性は脆弱であったから、初期の1000年ほどは、少なくとも100年に一度くらいの割で、どこかで新たに筆写されることが系統的に連続しなければ、その中途で湮滅していただである。同じギリシア哲学分野から一、二の例をあげれば、われわれの手にしうる『アリストテレス全集』とは、実際には、複雑な経路を辿って伝わった彼の「講義ノート集」のようなものだけと言っている。比較的若いころに彼が公刊した多数の著作は、（紀元後1世紀のケケロなどが熱心に読んでいたことまでは分かっているにもかかわらず）すべて失われた。さらに、デモクリトス（古代原子論の大成者、前5世紀）の場合には、「学問の五種競技選手」とあだ名されたように、きわめて多様な分野にわたってきわめて多数の著作を残したにもかかわらず、「デモクラテス」の名で伝わる倫理的アフォリズム集を別にすれば、後代著作家によるわずかな数語の引用語句のほかには、何も伝存しない。

今日まで伝承された古典作品には、ごくわずかながら古代パピュロスの発掘から直接復元されたものもある（アリストテレスの『アテナイ人の国制』はその一例）が、むろん大部分は中世に修道院で筆写された羊皮紙冊子本を経由している。その移行過程でも恣意的な取捨選択が働いたことは言うまでもない。プラトンについては、ここでもさいわい筆写が盛んになされ、そうした中世写本ないしそのコピーが現在200以上知られている（プラトン著作の若干ないしわずかな部分を含むだけのものが大半だが）。それらは、中世のキリスト教的ギリシア・ローマ文化圏（あるいはビザンツ文化圏）の各地僧院などで筆写所蔵されていて、ルネサンス期の古典文化復興の機運の中で、西ヨーロッパにもたらされたもの、さらにそれらから（ルネサンス期に）転写されたものを合わせた数である。「中世」写本とはいえ、むろん後者のほうがはるかに多いのが実際である。

ルネサンス後期に出版された古典作品の初期印刷本は、基本的には、すべてそれら中世写本

のいずれか一つをもとに活字化したものである（写本の原文批判的扱いは、のちの近代古典文献学の成立をまたなければならない）。プラトンのアルドゥス版もステファヌス版も同様で、ともにヴェネツィアの聖マルコ寺院に収蔵された筆写本（今日T写本と呼ばれるもの）の系統を引いた一本によっている。T写本は南イタリアないしシチリア島のどこから当地にもたらされたものと伝えられ、近代の文献学研究によれば、筆写年代は10ないし11世紀、プラトン写本のうちでもとりわけすぐれた数本の一つと見なされている（伝来する最古のプラトン写本は、9世紀末ないし10世紀初頭のもので、パリ大学にあるA写本、オックスフォード大学にあるB写本がそれである）。なおステファヌス版の著作配列順は、トラシュロス（後1世紀）の編纂に由来する伝統的な「四部作形式」にもとづくもの（T写本を含めて、中世有力写本は多くがそれに準拠している）とはまったく異っていて、独自に6部門立てした「体系」的配列を試みたものになっている。おそらくルネサンス期の新プラトン主義的哲学観を反映した新編集の結果なのであろう。

*

さきにも触れたように、ギリシア古典の活字本刊行は、ラテン語系の版本に較べて、半世紀ほど遅れて始まった。ギリシア語作品の読者層のうすさに加えて、活字版組みが煩雑だったせいもある。ギリシア語の基本的な字母自体はローマン・アルファベットより少ないくらいだが、テキストにはアクセント記号などの補助記号を頻繁に付加していく必要がある。それらを適正に活字組みするためには、ラテン語に数倍する労力と技術が要求され、校正はさらに困難だったにちがいない（今日ワープロでギリシア語原文を打てれば、おおよその察しはつくだろう）。書肆アルドゥスがギリシア古典を本



画期的だったアルドゥス版のギリシア語活字（アリストパネス『鳥』の冒頭部）

格的に出し始めるにあたって、そのシステムを新規に確立し、「アルドゥス式活字セット」なるものを考案したことは、本来画期的な事績だったはずである。この版を見ると、各字母が明確に活字化され、しかも美しい統一的な字体をなしているのが一目瞭然である。これはいかにも当然のこのように聞こえるかもしれない。しかし初期の印刷本は中世筆写本の代用量産化をコンセプトとしていたから、むしろ可能なかぎりそのヴィジュアル感覚を再現することが重視されていた（筆写本の体裁をそのまま活字化しようとしている点では、アルドゥス版も基本的には変わらないが）。グーテンベルク聖書の場合、特に良版では部分的に肉筆筆写や見事な版彩色が施されているのもそのためである。印刷字体にもそれは反映されて、ギリシア語については、各文字が流暢な筆記体を模倣するとともに、さまざまな複数文字の組み合わせを一体化した、一種の連綿体風装飾文字（「連字」といわれる）をそのまま活字化するような風潮が長らく優勢であった。機能性重視のアルドゥス式活字セットは、すぐには定着しなかった。その合理性と読みやすさは、どうやら時代を先取りしすぎていたのであろう。

ステファヌス版を見ても、なるほど各単語が一筆にペン書きされたように活字組みされていて、一見して活字印刷本とは思われない印象のものになっている。それを「鑑賞」するのも初

期印刷本を手にする楽しみの一つではあるが、実用的には必ずしもそぐわない凝りようだとも言わざるをえまい。17世紀に入って、ようやく今日にまでつながるギリシア語活字の基本型が定まった（R. ポーソンによる）とはいえ、その後も比較的長く筆写本的雰囲気をも温存しつつおいて、19世紀に降っても、しばしばなおいくつかの連字が残されている。現在われわれの使用しているギリシア語活字システムが、それらに較べると、きわめて簡潔で読みやすいものになっていることは一目瞭然である。もっとも、多少の贅沢を言えば、その機能的簡明さが、ときには、いかにも美的配慮に欠けた素っ気ないものに見えることも否めないところではある。

*

以下は、ステファヌス版以降の経緯である。

近代西欧に古典研究が盛んになるにつれて、よりよい古典テキストを求めて、新手法の古典文献学が確立されていく。そこで追求された精緻な原文批判においては、「テキスト校訂は複数写本の比較校勘によるべし」（Fr.A. ヴォルフ、18世紀後半）が基本原則とされ、また同一著作に多数の中世写本が伝存する場合、それらの間の臨写関係を推定して整理する「系図法」によって有力写本を決めることが主要な作業となった。この方法は、すでに15世紀の名高い人文主義者エラスムスによって提唱されていたものであったが、それを十全な手順として確立し、実際に着手したのは、ヴォルフの弟子K. ラッハマンであった。プラトンの著作は、当然ながら、この時代の古典文献学における最も顕著な研究分野をなした。18世紀末から19世紀を通じて、前述のように、ほぼ200の写本の存在が確認され、相次いで調査された結果、「系図法」的には、それらがおよそ7つの親写本（archetype）に遡源するものとして整理づけられた。裏返して言えば、200ほどの現存プラトン写本は、すべてそれらのいずれかから派生したものであることが確認され、したがって校訂は主としてそ

れら7つの比較を柱に行われることになる。さきに挙げたA、B、Tの記号を付されたものは、いずれも最も重要な親写本の位置を占めるものである。ほかに、ウィーン大学所蔵のW写本（12世紀か）、Y写本（14世紀か）、F写本（13世紀か）、ヴァチカン図書館にあるP写本（11世紀か）などがそれにあたる。これらは年代的には（さきの三者よりも）新しいが、A、B、Tが結局は中世初期に想定される（すでに失われた）同一写本から派生しているものと見られるのに対して、W、Y、F、Pはそれぞれ系統を異にした独自のルーツに遡るものとして、A、B、Tへの対抗的意義が評価され、近年の校訂ではいっそう重要視されている。（ただし、これらのどれ一つとして、プラトンの全著作をまとめて伝えているものはなく、ごく大まかに言えば、B、T、Wはトラシュロス編纂順の前半部、AとFは後半部に対応し - いずれも元来は2分冊写本の片割れだったのである - 、YとPはともに3割ほどの作品数を含む「選集」である。）

こうした古典文献学の黄金時代を主導したのは、ヴォルフやラッハマン（先述）の薫陶を受けたドイツの古典文献学者たちであった。中でもI. ベッカーは、体系的な校訂の確立と精力的な活動によって広く知られている。彼は61年間にわたってベルリン大学教授の職にあったが、その間大学に姿を見せることはまれなほどで、もっぱらヨーロッパ各地を渡り歩きながら写本の調査に費やす日々を送ったという。まずは「量」（写本の数）の充実を第一に心がけたベッカーは、おおまかながらも天才的な早業で、当時知られていたほとんどの古典関係写本に目を通して、校訂済みの各写本にアルファベットなどの略号を振り当てて異読を整理する方式を体系的に始めたのも彼であった。ただしプラトンの場合には、調査につれてその数があまりに多数に上ったために、ついにはドイツ語のヒゲ文字などまで動員した揚げ句に、收拾のつかない有様におちいってしまった。これまでに

も言及することの多かったA写本、B写本などの略称も、したがって、ベッカーの方式に倣ったものではあるが、今日では、A写本のほかは、いずれも彼自身が割り当てた符号とはまるで対応しないものに改められてしまっている。彼としては「誇るべき」残念な結果ということになるうか。ついながら、『アリストテレス全集』については、彼の編纂したベルリン・アカデミー版（1831年刊）が「標準版」とされ、一般にそれは彼の名を冠してベッカー版と呼ばれている。

しかし、それらプラトン関係の有力写本のうちでも特に古くてすぐれたB写本については、ベッカーは十分に活用することなく終わった。この写本は、実は19世紀になってはじめてその存在が知られるに至ったものである。エーゲ海のパトモス島でそれが発見されたのは、古典文献調査（あるいは写本獲得競争）たけなわの1801年のことであった。その唐突な出現は、プラトン写本研究史における最もドラマティックなエピソード、というよりも一つの「事件」に類する波紋を広げていく。

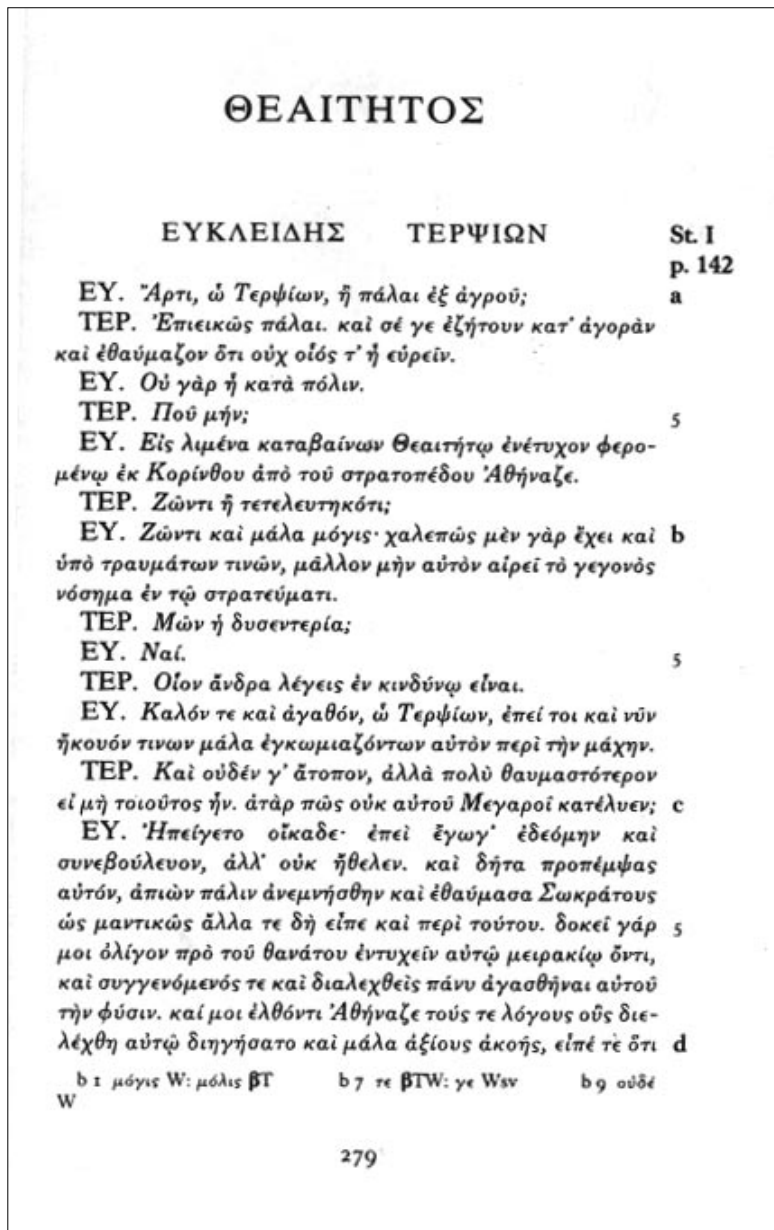
ケンブリッジ大学の鉱物学者E・D・クラークが、旅の途次に立ち寄ったパトモス島のアボ

カリュプス派修道院で、たまたまそれが床に転がっているのを拾い上げたとき、写本は（彼自身が「旅行記」に記しているところによれば）「湿気と虫の餌食になるにまかされ」ほとんど消滅寸前の状態であった、とのことである。それは、数年をへて、オックスフォード大学のボドレー図書館に納められる。1820年にTh.ゲイスフォードによる校訂の結果が公表されると、ただちにその卓越性が一般に認められた。まぎれもなく、それは、伝存する最古のプラトン中世写本であった（奥書に「御創世から数えて6404年の11月、写字生 Johannes がパトライの補祭 Arethas の委嘱により筆写せり。その報酬は…」とあり、ビザンツ教会暦によって換算すると、西暦895年に書写されたことになる）。写本作成を委嘱した「アレタス」は、後にカエサリアの大主教にまでなった著名な人物である。筆写はきわめて美しくつたんねんになされているうえに、おそらくはアレタス自身の手によると思しい訂正や欄外古註（スコリア）も書き加えられている。当然ながら、B写本の意義はほとんどセンセーショナルなまでに喧伝され、暗黙のうちに絶対的な有力校本と見なされつつあった。



奇跡の発見によってもたらされたプラトンB写本（『ソピステス』冒頭部）

しかし、ベッカーの先駆的活動を継承した次世代の人たち（M・シャンツ、J・クラルなど）は、彼がわずかに散見しただけのこの写本を校訂作業の中枢に繰り入れることによって、その真価を正當に評価するとともに、それとの対比において、むしろ他の写本のそれぞれに固有の存在意義を明らかにしていった。ベッカーの「量」に対して、写本の「質」を究明したのは彼らである。有力な



最新版『プラトン全集』の版組（1995 Oxford, 『テアイテトス』冒頭頁）。欄外の数字は、むろん、ステファヌス版の頁付けを示す。

対抗軸が定まることによって「系図」も明確になり、プラトンのテキストの校訂水準は飛躍的に高められた。最も遅れて西欧の古典学世界に登場した最古のB写本が、19世紀プラトン研究の強力な牽引車となったと言ってもよからう。

*

B写本発見からちょうど100年、次の世紀の変わり目にまたがった1899年から1906年に関

て刊行されたオックスフォード版『プラトン全集』（J・バーネット校訂、全5分冊）は、そうした19世紀古典文献学の成果の集大成に立つもので、今日それは、実質上ステファヌス版にかわって新たな「標準版」の役割を果たしている（むろんその欄外にもステファヌス版の頁付けが付されているが）。さらにそれから100年、目下新たなオックスフォード版『プラトン全集』の刊行がD・B・ロビンソン、E・A・デュークらの古典文献学者グループによって進められており、その第1分冊が1995年に刊行された。全5分冊が完結するのは、いまだ遠い先であろうが、より網羅的で完全な写本調査を踏まえて校訂されたこの成果は、ひとまず近代の古典文献学の理想を可能なかぎり実現したものと言えよう。しかし、それが最良のプラトン原典として、さらに新たな「標準版」となりうるか否かは、なお今後の評価に俟たなければなるまい。そもそも、このようにして追い求められてき

た最良のテキストなるものが、理念形として以上にあるのかどうか、はたして実際にわれわれは、9世紀のアレタスや16世紀のステファヌスが手にしていたものよりも格段にすぐれたテキストを目の前にしているのかどうか、をも問いに付しながら....。

（うちやま かつとし）

資料保存 - プラトン全集Platonis Opera 1578 Stephanus tom I, II, III修理と修復の経験 -

京都工芸製本協会 山野上 礼子

1. はじめに

京都工芸製本協会の山野上です。本日はこのようにお話をする機会を頂きまして、ありがとうございます。内山先生のプラトンのテキストの伝承についてのお話の後に、先生から以前依頼いただきましたプラトン全集の修理・修復の経験を基に、工芸製本(reliure)の話进行いたします。

2. 修復三つの柱

本の修復については、三つの柱から成り立ちます。

1番目は、本がバラバラになっている。これを単に何とかすると云うだけではいけません。一枚一枚、一帳一帳と本の状態を確かめて解いてゆきます。どんなふうに汚れているのか、どの様に綴じられているか、材料は何を使ってあるのか等々一つ一つメモをしていくことから始めます。この時一番にすることは自分が本の丁数を鉛筆で印すことです。昔の本は、どうしてもミスプリントがあります。「イ」の一番に自分のページ打ちを印しておかないと、長い作業中に迷子のページやプリントミスに出くわして、冷や汗をかきます。

今回最も驚いた先人の技術はネール(nerfs)と云いまして背のコブの綴じ方です。現代の製本の場合はフォー・ネール(faux-nerfs)と云いまして、本当に背に糸が通されているものではありません。飾りとしてこのスタイルを残しているだけですから、ほとんどブレ・ネール(vrais-nerfs)と呼ばれる本をみることはありません。今回のプラトン全集の場合は、大きな本ですから、こんな太い麻糸が2本ひとつのコブ(nerf)ごとに見事に編まれていました(見本参照して

下さい)。こんなふうに出来る限り本の状態を記録してこの通りに復元します。

本を解体(debrochage)しながら記録を取り、元の材料のコレクションをしてゆく。カルテを作るわけです。これにより、修復の方法、限度、材料等々を考えます。

2番目の柱は、紙の修理修復です。今回は紙の折山 - 背 が酸化してボロボロでした。多いものですと1ページに2cm位の巾で茶色く酸化していました。紙の折山がボロボロ状になって離ればなれになっているものですから、これら一つひとつ縫がないと綴じられません。各ページずつ順次糊付けして、元の形に整えます。何で接ぎ合わせるかと云うと和紙 典具帖、雁皮等 が一番いい、昔、ヨーロッパでは、Papier d'ongletと呼ばれる、巻きタバコや辞書に使われる薄い紙や模造紙(simili Japon)が使われました。《模造紙》は何を「模造」したのか？和紙なのです。最近の本物の和紙が一般的になってきました。私は良いものを見つけました。和文タイプ用の薄葉紙。これをいつも使用しています。最近和文タイプを使う人が居なくなったのでこの紙を手に入れにくくなり、困ったものです。この様にとても丈夫で薄い紙です。今回もこれで全部修理しました。所々にある穴の部分もこれをはった上(頁の中)にvolumeと同じ紙をうめて塞ぎました。破れた所も全部縫いでいって、一枚の元の状態に紙を修理します。

3番目の柱が製本工程になります。元の形、Tom I, II, IIIとしてvolumeを組み立てていきます。

この講演前に上映していましたビデオを、早く来ておられた方は見られたと思います。製本

完成に280時間、54工程の手順で製本します。どの様な体裁の製本にするのが問題です。現在は、本当に元のまま、出版され、製本されたとおりにするのが理想とされています。ですから、学者、当時の専門技術の知識のある人、職人さん達によって、その形が決めます。そして、これをちゃんと決められた通りに実現するのが理想的ですが、これらが正確に実行実現できる所は、パチカンしかないと言われていいます。と云われるのは、当時の縫糸、麻糸、紙等々の材料が今でも保管され、使用できるのは、パチカンの修復部しかないと言うわけです。本に限らず、いろいろな美術工芸品の修復は、ここでしか出来ないとのこと。私は行ったことはないのですが、パチカンでは製本の修復のための講習会があり、ここで勉強した友人からその様に聞きました。

製本工程を説明することは時間がかかります。ホール前に道具の写真等を展示しましたので見て下さい。また、今、会場に赤いリボンをつけた5人の製本仲間がおりますので、時間のある方はこの人たちに質問して下さい。

製本の装丁で理想とするのは革、紙の端にいたるまで、元の本にはめ込むのがいいのですが、日本で私が製本をさせていただいた場合は、とにかく読めるように毎日利用できる本にしてほしいと言う話が多いので、私が感じていたとおりの装丁にさせていただいております。多分他の国の人に言わせると「なんてことをするのだ」と思われることと思いますが、文字を読む人があつての本ですから、その時代、その時代で職人が必要のように作った、そういう修復の仕方であっても良いのではないかと考えています。それで今回も元の本とは似ても似つかないものになっていますけれどもReliureのにおいだけは大切にしながら仕事をしています。多分これは感じていただけたと思います。何百年か経ち、平成の世に、こんなことをした人間がいたんだなと思って、手にしてくれる人がいればよいのですが。

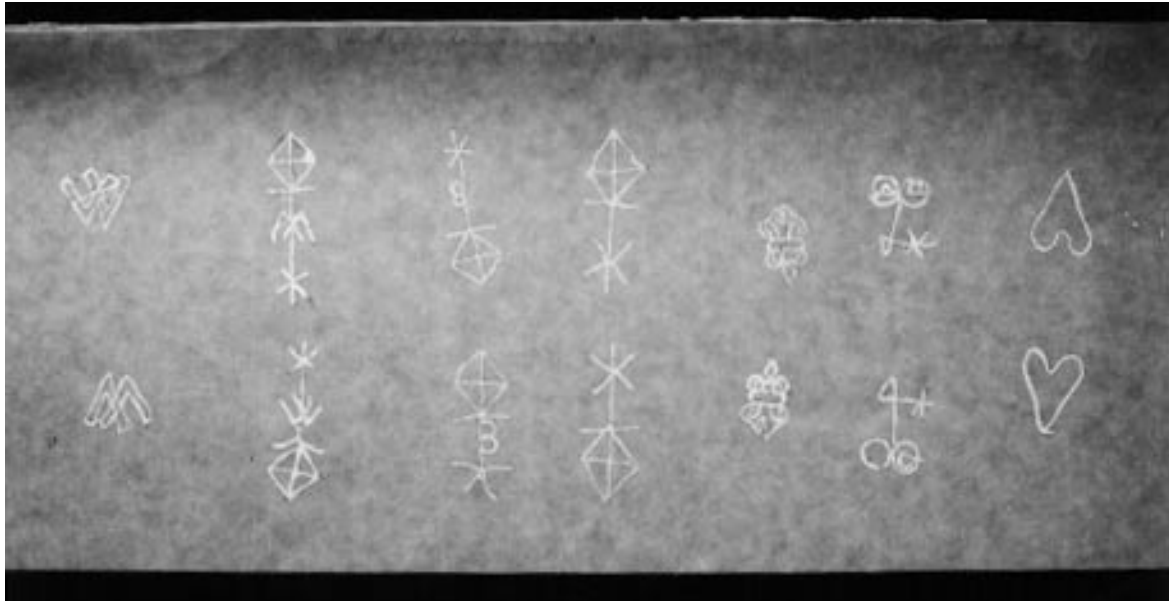
3. 修復の楽しみ

修復をしていると、昔の職人さんと対話ができる。作業中のタイムスリップはとても楽しいことです。その時代の世界に触れることが出来る。

ある本には、裏紙に当時の職人さんが書いたのか、誰が練習したのかわかりませんが、ペン習字(calligraphie)の試験を受けるためのものと思われる紙が出て来ました。それから、これはゴヤの版画を修復したときですが、版画を製本する場合は、版画自体を傷つけないために「のど」又は「アシ」と呼ぶ紙をはってあるのですが、その見事な、どこをつつついても適当なところの微塵もない仕事に出会い、吾が仕事を返りみて、ヒヤリとさせられることがありました。果たして自分はどこまでこの技術について行けるのかなと思いながら挑戦することもありました。

今回のプラトン全集にもありました。ホール前の展示ケースを御覧になったと思いますが、ウォーターマーク《filigrane》《すかし》が出て来ました。これらは二つ折りにした紙の所に全部入っていました。これは私が見つけたのではなく、堤美智子さん（前数理解析研究所図書掛長）が見つけてくれたものです。私はひたすら時間に追われ修復にばかり気をとられているものですから、透かして見ると云う余裕はなかったのです。《すかし》があると教えられて光にかざすと、何とも可愛らしい、しかし何の意味があるのか解らない《透かし》がそこにひっそりとありました。それで、これは記録しておかねばと、もう出来上がっていたcahiers一帖、一帖をもう一度開けて写し描きました。これが展示ケースの所にあるのです。これらは500年前に綴じ合わされ、誰の目に触れることもなくそこに有ったと云うことです。何とかこれらを皆に見てもらいたいと、いろいろ考えて形にしたのが外にあるものです。このウォーターマークに関しては何一つ解っていません。発見したばかりですから。ただただ今はこれらほのぼのとした形に魅せられています。

今回のプラトン全集に使われている紙は漉き



(ウォーターマーク)

方が大へん稚拙で漉きむら、混ざりもの、鉄粉やブラシの毛等が入っていました。にもかかわらず、これらの“すかし”の形の完成度は高いと思います。

4. 酸化の敵は《ほこり埃》

今日ここに来られた方々は、本をとおして生活なさっている人々なので最後に修復者の立場からお願いが一つあります。

クーリス(Prof.Konstantine Choulis)さんとおっしゃるパチカンの本の修復プロジェクトに関わっておられるアテネ大学の美術の先生にお目にかかって言われたことをお伝えしたいと思います。

お目にかかった折幸いなことに、イタリア語に堪能な通訳さんがついていて下さいましたので意思の疎通が出来て嬉しい時間でした。日本の修復の状態とヨーロッパの修復の現状等々いろいろお話を伺いました。その中で日本の図書館として今何が出来るのか、何をすれば一番い

いのですかと伺いましたところ「ウーンツ」としばらく考えられた後、言われたことは『埃を掃って下さい』とのことでした。酸化の一番の敵は埃です。だから埃を掃う事、と云われたのです。これならやる気のある人なら出来る。書庫への行き帰りに掃えばよい。全部しなくても少しづつやって下さればよい。と言われたのです。たしかに書庫を一度に全部掃除するということは大変な労力が要り、あんまり嬉しい仕事ではありません。本が傷んでいくのを何とかしたい。そういう気持ちのある人がほんのちょっと手を加えることで、少しでも本を長持ちさせる。埃を掃うことから、紙の酸化の現実、これらを解決する方法と諸々の問題を意識して下さい、古書の保管という次のステップへと続いてゆける。

とても納得出来る助言でした。ぜひ本の酸化を患い、古書の保護と管理に関心をお持ちの方々、この埃を掃うと云う実行をお願いします。これで終わります。(やまのうえ れいこ)

内山勝利教授、山野上禮子さんには平成14年度第3回近畿地区国公立大学図書館協議会講演会にて演題「洋書古版本の修復について」講演いただきました。

今号に講演内容を元にした原稿をいただき掲載させていただきました。改めて御礼申し上げます。

図書館(室)に通ってみよう！

大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員PD 林 創

あらためて考えてみると、研究とはかなり贅沢な活動と言えそうです。たとえばワーグナーがルートヴィヒ二世の庇護を受けていたように、芸術家たちの多くはパトロンがいて資金の援助を受けて活動を続けていたわけですが、勉学・研究に従事する者も政府や企業などからの研究資金の援助がなくては継続して活動が続けるのが難しいものです。このように研究を遂行するには、どうしても費用の面を意識せざるを得ないと思います。しかしながら、費用の面を気にせずに研究活動を支援してくれるものがあり、それこそが自由に使える図書館といえるでしょう（もちろん、授業料や税金などによって成り立っていることを決して忘れてはなりません）。

私は京都大学で学びはじめて今年で8年目となりましたが、入学当初を振り返ると、現在までの間に図書館に関する多くのことが変わったことを感じます。

その第1は、情報の電子化です。たとえば、最近では飛行機の機内で映画などを自分の好みの時間に見ることができるようになってきたところで、こうしたサービスは「オンデマンド（on demand）」と呼ばれています。図書館においても、情報の電子化により、このようなオンデマンドのサービスが高度な形で進行していると思います。たとえば、開館時間に左右されることなく、研究室でオンラインジャーナルから研究論文をチェックし、必要な文献をダウンロードして入手することが可能になりましたし、自宅で研究活動をしているときに文献が必要になれば、いつでも京都大学に蔵書がないかをOPACでチェックできるようになりました。こうしたサービスは、研究のスタイルを以前と比較して根本的に変えたすばらしいものといえるでしょう。

第2は、自分自身の図書館との関わり方です。私はもともと本が好きなこともあって、入学当初から図書館に行く機会が多かったと思います。私がよく利用していた（そして、今でももっともお世話になっています）教育学研究科・教育学部図書室は、蔵書が地下の書庫に開架式で収納されています。そこで、大学に来るとしばしばこの書庫に入り、文献を探索したものです。真夏でもひんやりとして、独特のおいがる書庫には、次第に愛着がわいてきます。あまり明確な目的も持たずに、図書室に入り、本を気の向くまま探して読んだり、絶版本などの中に研究のヒントになりそうなものを見つけてニヤリとする、そんな時間が案外良いものでした。こうしたことを続けていると、しだいに背表紙やタイトルを見るだけでも、自分にとっておもしろそうな本かどうか、あるいは必要な本かどうかを判断する感覚が鋭くなってきているように思います。また、図書室の司書の方々との雑談から新たな研究のアイデアが生まれたり、貴重な文献を紹介していただいたことも頻繁にあります。

最近では、上記のようにオンデマンドによるサービスを利用できるようになったことや、その他の仕事が増えて時間がなくなってきたこともあり、明確な目的を持たずに書棚を探索する機会や、司書の方々と雑談する機会が明らかに少なくなりました。継続して勉学・研究を進めるために不可欠な研究資金の援助を受ける機会は増えてきましたが、本の背表紙やタイトルで必要性などを判断する感覚は鈍くなったように感じますし、研究のアイデアを生み出す大事な機会を失っているような気もしています。それらを取り戻すためにも、また図書館（室）に頻繁に出入りして、これまで以上にお世話になりたいと思っています。（はやし はじむ）

あなたが創る「京都大学MyLibrary」

新しい図書館ポータル・サービス、10月からトライアル開始！

京都大学MyLibraryワーキング・グループ

「京都大学MyLibrary」とは？

OPAC、電子ジャーナル、オンライン・データベース、役立つサイトなど...インターネット上の資料・資源・検索ツールを使うことはいまや皆さんの研究・学習に欠かせなくなっています。しかし、それらをいつもすぐ使えるように整理しておくのは難しいと感じていませんか？

「京都大学MyLibrary」は、そんな皆さんひとりひとりのためにつくられた、Web上の図書館です。

「京都大学MyLibrary」は、インターネットを通じてアクセスできる資料・資源・検索ツールなどをあなたの書斎や勉強部屋のように整理しておける、新しいツールです。

それだけではなく、「京都大学MyLibrary」は、京都大学の図書館が提供しているインターネット・サービスをワンストップで、もっともっと便利に使っていただくことのできる、図書館ポータルです。

京都大学の構成員であればどなたでも「京都大学MyLibrary」を利用可能です。研究に学習に、ぜひご活用ください。この10月から試行的にサービス開始です。

「京都大学MyLibrary」でどんなことができる？

自宅や出張先など、世界中どこからでもアクセスできます。現在の研究・学習分野に関係のあるインターネット・サイトを集めてリンク集を作り、MyLibraryに保存しておけますので、簡単にそのサイトにアクセスすることができます。

皆さんの研究・学習に役に立つインターネット・サイトを図書館が厳選し、提供します。

皆さんは、そこから自分に必要なサイトを選ぶだけで、オリジナルなリンク集を作成できます。自分で作ったリンク集と組み合わせることも可能です。

電子ジャーナルや、オンライン・データベースのリストから、研究分野にあったものだけを選んでリストをつくることができます。

「京都大学OPAC」も同じ画面から検索できます。さらに、近隣の大学のOPACとの横断検索もでき、図書や雑誌を探す機能が強化されています。

図書館からのニュース、新着資料の情報などもワンストップで得ることができます。

あなたが借りている図書・雑誌の情報や、依頼中の文献複写の処理状況を画面で確認することができます。

メモを書き込んで、保存しておけます。

「京都大学MyLibrary」を使うには

「京都大学MyLibrary」を利用するためには、まず、附属図書館またはもよりの図書館／室（ ）で利用の申請をし、初期パスワードの交付を受けてください。図書館利用証IDとそのパスワードで「京都大学MyLibrary」にログインすれば、あとは自由に自分の図書館を組み立ててゆけます。

ひとつひとつのサービスや機能の単位を「コンテンツ」と呼びます。コンテンツのレイアウトを並び替えたり、新たなコンテンツを追加したりすることが可能です。もちろん、一度構成したMyLibraryは、次にログインするまで保存されていますので、何度でも自分にあった環境でご利用いただけるというわけです。

（ ）利用申請の受付をおこなっている図書

館／室については附属図書館ホームページに一覧表を掲載しています。

「京都大学MyLibrary」は、本学の図書館員で構成するワーキング・グループのディスカッションの中から生まれたサービスです。システムは、富士通（株）により開発されました。

より充実したサービスを皆さんにご提供するために、ワーキング・グループは、今後も新た

なコンテンツや機能の開発に努めてまいります。今回ご利用になってみて気がついたこと、ご意見・ご感想があれば、ワーキング・グループまで遠慮なくお寄せください。いただいたご意見は、「京都大学MyLibrary」の発展に反映させていきたいと考えています。

Eメール：mylib@kulib.kyoto-u.ac.jp

（きょうとだいがく まいらいぶらりーわーきんぐぐるーぷ）

「京都大学MyLibrary」にアクセス！

<http://my.kulib.kyoto-u.ac.jp>



九九から始まる九九

公開企画展「和算の時代」に向けて

附属図書館情報管理課雑誌情報掛 福島 利夫
(公開企画展ワーキング・グループメンバー)

問1：小学校低学年の算数の授業で、誰もが暗誦させられる掛け算九九。今思えば、健気にもよく覚えたものです。この九九、日本には何時頃からあるのでしょうか。

A)奈良時代 B)鎌倉時代 C)江戸時代。

問2：ところで、この掛け算の表をなぜ「九九」というのか、疑問に思いませんか？なぜ、冒頭の「一一」とか「二二」ではなく、最後の「九九八十一」の「九九」なのでしょう。

答1：正解はA)です。あるいはもう少し前に中国から伝来したと考えられています。随分と古くからあることに、驚かれませんか？

答2：昔は今と違い、「九九八十一」から始まり、逆順に続いていました。それで「九九」という呼び方が定着したのです。

証拠は、と言いますと、これがちゃんとあるのです。皆さまご存知の文学作品や歴史史料の中に、面白い記述が見つかっています。

詳しい解説は、平成15年度附属図書館公開企画展の会場で、ご覧ください。

本企画展は、11月8日から12月7日の期間、百万遍の思文閣美術館を会場として、開催されます。テーマは「和算の時代 日本人の数学力をたどる」です。

西洋の数学がまだ伝わっていなかった江戸時代に、日本では「和算家」と呼ばれる学者達を中心に、驚くべき高度な数学がはぐくまれました。また庶民たちも、そろばんを始めとして、数学のいろいろな知識を、生活の一部としてごく自然に身に付けていました。

本企画展では、この江戸時代の和算に関する京都大学の蔵書を展示のメインとしますが、その他にももう少し視野を広げて、日本人がさらに昔の古代から、どのように「数」というものと関わって来たのか、その風景が垣間見られるよ

うな面白い資料を、文学作品や歴史史料の中から探して、展示する予定です。

問3：電卓が普及する前の計算道具といえば「そろばん」。そろばんは中国から日本に伝わりました。伝来の時期は、室町時代後半かと考えられていますが、正確には不明です。では、そろばんが普及する前の計算道具といえば、何でしょうか？

答3：「算木(さんぎ)」です。算木とは、木や竹で作った角棒のセットで、これを、方眼を作った盤の上に置き並べて操作し、計算を行います。簡単な計算をするだけならそろばんの利便性にはかないませんが、算木を使えば、連立方程式や高次方程式を解くことも可能なので、そろばん伝来後も、明治時代初めまで使用されていました。

昔の人が、この算木を使用している場面が、『今昔物語集』の中に描写されています。

『今昔物語集』巻28の第27は、傀儡子(くぐつ：人形使いの芸能集団)出身の目代(めだい)の話です。伊豆守は、部下の目代として任用するにふさわしい人物を探しています。ある人から紹介された人物は、年六十ばかり、かつぶくのよい「こわもて」の男。面接試験で事務能力を見てみます。字を書かせると、悪くない筆跡。ややこしい租税関係の文書の計算をさせると、男は「算木」を取り出して、ぱちぱちぱちんと計算を仕上げています。

今で言う電卓よりは随分大きそうですので、ノートパソコンでも取り出して、すらすら使いこなしているイメージでしょうか。文句なしの目代職合格です。

この目代、謹厳実直に仕事をこなし、評判も上々ですが、ある時、昔の傀儡子仲間の歌声に、

我慢出来ずに踊り出してしまっ、ちょっとだけ箔が落ちてしまった、というのが話のおちです。

企画展会場には、算木の現物も展示しますので、是非ご覧ください。また、算木の模型を使って、実際に簡単な計算を体験していただくコー

ナーも設けます。(高次方程式の解き方など難しい問題を係員に質問していじめることはご遠慮願います。)

従来とは少し違った、親しみやすい企画展を目指して、日々準備しております。皆さまどうぞご期待ください。(ふくしま としお)

平成15年度京都大学附属図書館公開企画展

主催：京都大学附属図書館・思文閣美術館
後援：朝日新聞社

開催期間 11月8日(土)～12月7日(日)
休館日 11/10(月)・17(月)・25(火) , 12/1(月)

会場 思文閣美術館

開館時間 午前10時～午後5時

入場料 大学生・一般：400円 高校生：300円 中学生以下：無料

記念講演会

第1回

日時：平成15年11月8日(土) 午後2時～午後4時

会場：思文閣美術館

『面積って何だろう』(中高生・一般向)

講師：上野健爾氏(京都大学大学院理学研究科教授)

『幕末の数学者 小野友五郎』

講師：鳴海 風氏(小説家)

当日の講演会は入場券で参加出来ます。

先着120名までとさせていただきます。

第2回

日時：平成15年11月13日(木) 午後1時30分～午後3時30分

会場：京都大学附属図書館3階 AVホール

『和算から洋算へ』(大学生・一般向)

講師：上野健爾氏(京都大学大学院理学研究科教授)

当日の講演会は無料です。

過去の展示会は、こちらをご覧ください。

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/tenjikai/index.html>

緑の森から本の森へ

原子炉実験所図書掛長 澤 谷 正

原子炉実験所は、京都から約90km離れて、関西国際空港の近くに全国共同利用研究所として、昭和38（1963）年4月に開設されました。国立大学としては、最大規模の研究用原子炉（熱出力5000キロワット）を持ち、敷地面積は、約10万坪です。

敷地内には、開設40周年を迎えた現在も人類未踏？の森や池があり、そこには、野生のいたち、狸、大亀等が生息しており、見慣れぬ樹木がうっそうと生い茂っています。



幹線道路わきには、開設当初からの桜や、メタセコイア、松などの樹木が40年の間に巨木と呼ばれるにふさわしい位に成長し、四季折々の表情をみせています。

特に桜の木は、100本以上ありますので、春の桜の開花時期には、

花吹雪で周辺が淡いピンク色に染まってしまいます。

その敷地内に、各施設が点在しており、図書棟は、事務棟の隣、正門に近い位置、それでいて、緑に囲まれた場所にあります。図書棟の中には、図書室の他に、医務室、会議室などがあり、所内共同の場所と位置付けされています。しかしながら、構内が広いので点在する施設から、少なからず距離があるのが、地理的には短所です。

当図書室の特徴としては、当実験所で行われている研究は、非常に広い分野にわたっているので、所蔵されている図書資料も、数学、物理、化学、生物、医学、環境、工学と広い範囲をカバーしています。当然ながら、原子核、原子力、放射線等に関するものが主体となっています。特徴ある資料としては、IAEA（国際原子力機関）発行の資料は、ほとんどもれなく集めています。その他、創刊より所蔵している雑誌も多くあり、貴重な資料群となっています。当図書室は、国立大学等文献複写受付館になっておりますので、全国各地から文献複写の注文や相互利用の要求が舞い込んできますが、特にIAEAを初め、原子力関係の資料の需要が多いです。

また、窓際には、ロッカーがずらっとならんでいます。その数20本です。中には、当実験所発行のレポート（KUR, TR, PROGRESS等）がぎっしり入っています。これらのレポートの全国内外関係大学、機関などへの発送作業、ならびに出納業務もしています。

なお、ネットワークを京都大学附属図書館と結び、京大として、契約している各種のオンラインジャーナル、データベースは、図書室内はもちろん、各研究室の端末からも利用できるよう整備されています。

近年、科学の発達により、図書室へわざわざ足を運ばなくても、研究室等の端末から、オンラインジャーナルや、全国内外大学等の蔵書検索もできるようになり、冊子体目録や、目録カードもその役割をそろそろ終えようとしている昨今、所内全蔵書を端末から検索できるように、遡及入力を進めています。が、日常の業務の隙間に作業をしているので、なかなか、入力件数が上がらないのが悩みです。なんとかこのスピードを早めたいものです。

閲覧室には、新着展示コーナーがあり、新着雑誌は1週間、新着図書は1ヶ月、展示しています。また、利用者の研究・学習・調査活動に対応できるように、マックとPCの端末各1台、そして、プリンターとスキャナーがセットされています。検索に不慣れな利用者のために検索指導も随時行っています。

カウンター周りには、カラーコピー機、FAX、大型裁断機等が、並んでいます。

また、図書資料の保管については、書庫も狭いですが、古い雑誌等の資料を別室へ保管すると利用に不便な為、書庫東北側に集密書架4段複式4連が19台設置されており、和洋雑誌の1975年以前を中心として、収納しています。

所員及び共同利用者に対する図書室の利用は、オープンであり、勤務時間外は、守衛棟に図書室の鍵を預けていますので、守衛棟から鍵を借りれば、休日及び夜間の利用も可能となっています。

他の利用者（一般）に対しては、あらかじめ連絡をいただければ、勤務時間内に限り、閲覧は可能となっています。

日々、より良い図書室（館）とは何かと言う事を考えつつ、実践しつつ、業務を3人（掛長、掛員、パート職員）でこなしています。

皆様、少々京都からは遠いですが、緑の美しいこの地へぜひ、一度お出でください。特に桜の季節がお勧めです。

（さわや ただし）



附属図書館利用統計（平成14年度）

平成14年度は、利用者サービス面で一定の前進がありました。例えば、開館時間を延長することが出来まし、一部の機関ではありますが、海外への文献複写の支払いが校費で出来るようになりました。開館時間の延長は、永年の懸案でしたが、平成15年1月6日から平日は21時から22時に延長をし現在に至っています。

入館者総数は、前年度と比べて18,558人減少しています。しかし、年間貸出人数は、前年度と比べて1,173人、貸出冊数では2,541冊増えています。入館者数の減少は、電子ジャーナルの普及等で、オンラインで居ながらにして研究室等から必要な情報を入手できるようになったこと等ネットワーク環境が整備されてきていることを意味し、ハイブリッド型図書館の実現に一歩近づいていることがわかります。

統計の詳細は、次のとおりです。

入館利用状況

1. 年間入館者総数

715,172人

内訳

学 内	入館機	704,323
	マニュアル*	4,406
学 外	閲覧**	5,600
	見学	843

(人)

*マニュアル：忘れり、紛失等による利用証不携帯の入館者

** 閲覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者と共通閲覧証による入館者

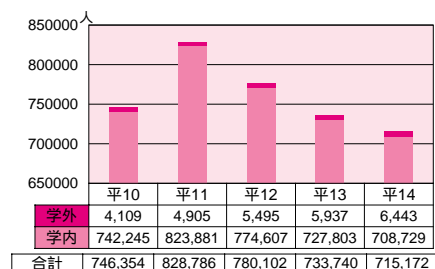
入館機による入館者 704,323人について

開館日 1日当たり	2,309
平日 1日当たり	2,802
土・日曜日 1日当たり	925
1日の最多入館者数*	4,842

(人)

*平成14年7月15日

2. 入館者総数5年間推移



利用対象者数

1. 学内教職員・学生数

32,183人（平成15年5月1日現在）

2. 登録者総数

35,075人（平成15年5月1日現在）

内訳

教 官	3,356人
院 生	8,331人
学 生	13,963人
職 員	2,836人
その他	6,589人

その他には卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生、放送大学生等を含む。

3. 利用証発行枚数（平成14年度）

3,003枚

新規交付	2,226枚
再 交 付	777枚

（うち放送大学生は528枚）

（再交付とは、紛失・有効期限切れ・転部・改姓等をいう）

資料利用状況

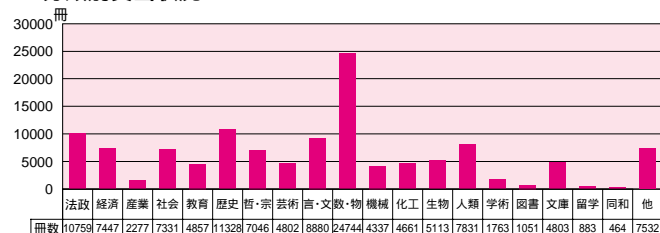
1. 普通図書貸出利用状況

年間利用冊数	128,542冊
年間利用人数	68,243人

2. 学内者への貸出

	平成14年度	平成13年度
年 間 貸 出 冊 数	127,909冊	125,238冊
年 間 貸 出 人 数	68,002人	66,750人
1 日 平 均 貸 出 冊 数	419冊	413冊
1 人 当 たり 貸 出 冊 数	1.9冊	1.9冊
年 間 貸 出 冊 数 最 高 日	7月23日(1,072冊)	2月12日(1,097冊)

3. 分類別貸出状況



4. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1. 富士川文庫	412冊
2. 河合文庫	291冊
3. 和貴重書	239冊
4. 清家文庫	175冊
5. 菊亭文庫	157冊

参考業務

文献調査 国内

1. 受付件数

		平成14年度(件)	平成13年度(件)
内容	所蔵調査	5,514	6,323
	事項調査	482	451
	その他	4,584	4,308
	合計	10,580	11,082
形式	FAX(文書を含む)	2,080	2,628
	電話	3,355	2,760
	カウンター	5,145	5,694
	合計	10,580	11,082

2. 依頼件数

		平成14年度(件)	平成13年度(件)
内容	所蔵調査	181	251
	事項調査	45	25
	合計	226	276
形式	FAX(文書を含む)	226	276

3. 機関別受付・依頼件数（ただしFAX・文書に限る）

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	35	2
国立大学	314	78
公立大学	129	10
私立大学	1,217	75
国立共同利用期間	6	0
公共図書館等	24	7
非営利団体	63	27
一般企業	20	10
個人	271	0
国立国会図書館	1	17
合計	2,080	226

4 学内者・学外者別利用件数

学 内 者	5,306
学 外 者	5,274
合 計	10,580 (件)

国外

受付件数

平成14年度	平成15年度
18 件	13 件
15機関	10機関

相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

	平成14年度(件)	平成13年度(件)
発 行 件 数	1,047	1,010

3. 文献複写

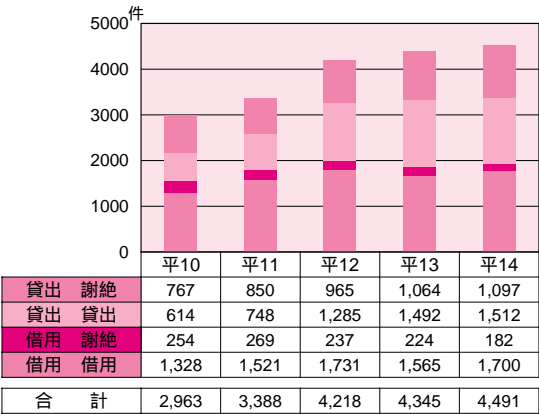
	平成14年度(件)	平成13年度(件)
依 頼	5,471	4,768
受 付	21,203	22,224
合 計	26,674	26,992

内訳

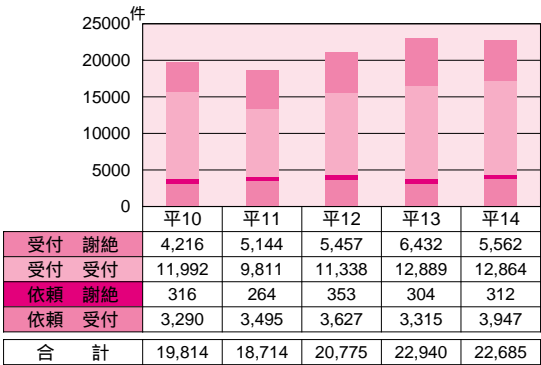
	国 外	国 内	学 内	合 計
依 頼	297	4,259	915	5,471
受 付	89	18,426	2,688	21,203
合 計	386	22,685	3,603	26,674

2. 現物貸借

現物貸借5年間推移



文献複写(国内)5年間推移



教官著作寄贈図書一覧（平成15年5月～8月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	梅棹 忠夫	An Ecological View of History	Trans Pacific Press	2003
名誉教授	笠原 皓司	微分積分学	サイエンス社	1978
名誉教授	笠原 皓司	微分積分学	サイエンス社	2000
名誉教授	笠原 皓司	線形代数学	サイエンス社	2000
名誉教授	笠原 皓司	詳説演習微分積分学	培風館	2000
名誉教授	笠原 皓司	詳説演習線形代数学	培風館	2000
名誉教授	菊池 晴彦	先端医療シリーズ9 脳神経外科医のための血管内治療	先端医療技術研究所	2001
名誉教授	菊池 晴彦	先端医療シリーズ15 脊椎・脊髄外科の最前線	先端医療技術研究所	2002
名誉教授	菊池 晴彦	先端医療シリーズ16 機能的脳神経外科の最先端	先端医療技術研究所	2002
名誉教授	菊池 晴彦	先端医療シリーズ17 脳欠陥障害の最新医療	先端医療技術研究所	2002
名誉教授	菊池 晴彦	Strategic Medical Science Against Brain Attack	Springer	2002
名誉教授	祖田 修	農学原論〔中国語翻訳版〕	中国人民大学出版社	2003
名誉教授	立本 成文	地域研究 夢現	立本 成文	2002
名誉教授	渡辺 弘之	タイの食用昆虫記	文教出版	2003
名誉教授	渡辺 弘之	カイガラムシが熱帯林を救う	東海大学出版会	2003
文学研究科	永井 和	青年君主昭和天皇と元老西園寺	京都大学学術出版会	2003
文学研究科	家入 葉子	Essays on Medieval English	開文社	2002
理学研究科	石田 英実	人類学と霊長類学の新展開	金星舎	2002
工学研究科	森澤 眞輔	地球水資源の管理技術	コロナ社	2003
農学研究科	河瀬晃四郎	ウツボカズラ考	京都大学大学院農学研究科附属農場	2003
農学研究科	河瀬晃四郎	ウツボカズラ譜	京都大学大学院農学研究科附属農場	2003
人間・環境学研究科	小方 登	シルクロード学研究Vol.17 衛星写真を利用したシルクロード地域の都市・集落・遺跡の研究	シルクロード学研究センター	2003
地球環境学堂	小川 侃	「新しい現象学」からみた集合心性論の新しい可能性についての研究	小川 侃	2003
数理解析研究所	熊谷 隆	確率論	共立出版株式会社	2003
原子炉実験所	山名 元	Proceedings of the JAPAN-KOREA Workshop on Nuclear Pyroprocessing	京都大学原子炉実験所	2002
霊長類研究所	竹中 修	類人猿の進化と人類の成立1,2(1-3),3	京都大学霊長類研究所	2003
霊長類研究所	友永 雅巳	チンパンジーの認知と行動の発達	京都大学学術出版会	2003
留学生センター	蘭 信三	下伊那のなかの満州	飯田市地域史研究事業準備室	2003

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にご寄贈いただきました。今後とも蔵書充実のため、ご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

「受験生のための京都大学オ - プンキャンパス2003」の報告

今年のオープンキャンパスは、8月11日（月） 12日（火）の2日間開催されました。昨年から始まったこの「オ - プンキャンパス」に、附属図書館も引き続き参加しました。今年の受験生等入館者数は、2,046名（11日：688名、12日：1,358名）でした。

受験生等には、まず受付で、図書館を紹介したパンフレット『京都大学附属図書館へようこそ2003』と見学箇所を順番に表示した案内を配布し、附属図書館の開館状況や、学習や研究に取り組んでいる諸先輩と、それを支える図書館の姿を見学してもらいました。



附属図書館玄関前「受付」にて



附属図書館 2 階開架閲覧室

図書館の動き

平成15年		27日	平成15年度外国雑誌センター館会議（於：東大）
5月20日	国立情報学研究所メタデータ・データベース共同構築事業実務説明会（於：京大農学講堂）	7月1日	平成15年度国立情報学研究所地域目録講習会（～3日）
		7日	平成15年度大学図書館職員長期研修（～25日、数研秋本掛員参加）
27日	平成15年度第1回附属図書館商議会	8日	平成15年度京大附属図書館主催図書系職員初任者研修（～11日）
	平成15年度第1回外国雑誌に関する専門委員会		平成15年度第1回国公私立大学図書館協力委員会（於：大阪市立大学）
28日	国立大学附属図書館事務部課長会議（於：東京医科歯科大学）	11日	近畿地区国立大学附属図書館協議会事務部課長会議
29日	国立大学図書館協議会常務理事会、理事会（～30日、於：東大）	22日	宇治分館運営委員会
29日	平成14年度図書館高度情報化特別委員会（第2回）（於：東大）	23日	韓国歴史研究者京都大学訪問団来館
6月10日	図書系事務連絡会議	24日	平成15年度第2回商議会
13日	近畿地区国公立大学図書館協議会総会	30日	平成15年度第2回選書分担商議委員会議
19日	平成15年度第1回京都大学附属図書館講演会	8月1日	富山県立福野高校生見学来館（49名）
24日	韓国国立中央図書館代表団来館	11日	京都大学オープンキャンパス・附属図書館開放（～12日）
25日	平成15年度国立大学図書館協議会総会（～26日、於：埼玉大学）		

目次

「ステファヌス版」以前以後	1
資料保存	8
図書館（室）に通ってみよう！	11
あなたが創る「京都大学MyLibrary」	12
九九から始まる九九	14
緑の森から本の森へ	16
附属図書館利用統計（平成14年度）	17
教官著作寄贈図書一覧（平成15年5月～8月）	19
「受験生のための京都大学オ - プンキャンパス2003」の報告	20
図書館の動き	20

編集後記

天候不順な夏でした。秋の実りが心配です。でも読者のみなさまは、実り多い夏休みを過ごされてキャンパスに帰ってこられたことでしょう。大いに図書館を利用して今年度後半戦に備えてください。ご利用をお待ちしています。（C）